

香取遺産

Vol.119

善雄寺の仏像

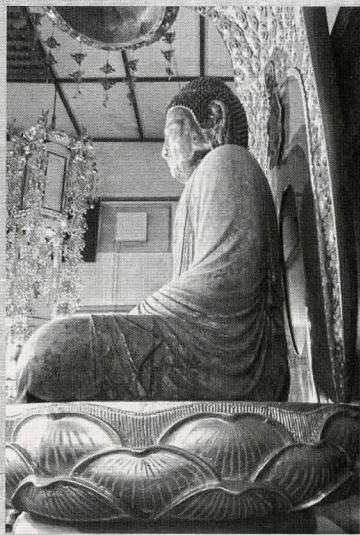
丈六の阿弥陀如来坐像

圓生涯学習課

☎(50)1224



▲正面



▲側面

一ノ分目地区にある善雄寺は、浄土宗のお寺です。

開山は登蓮社玉譽伝公上人で、康永元年（1256）に小見川領主であった粟飯原左衛門尉平孝宗の家老、成毛對馬守禪定門が大旦那となり開基したと伝われます。

ご本尊は、木造阿弥陀如来坐像で、像の高さは176cmもある等身大のいわゆる「丈六仏」と呼ばれるものです。ヒノキ材の寄木造りで、目は彫眼で、漆に金箔を貼る漆箔で仕上げられています。

像容は、切付の螺髪とし、白毫と肉髻に水晶が嵌められています。耳たぶは紐状にして貫通、三道を刻み出し、衲衣は、左肩を覆い、右肩に少しかけるようにしています。膝上で阿弥陀定印を結び、右足を前にして結跏趺坐しています。

そして、頭部（平安時代末期）像内には、宝永2年（1705）の修理銘札が残され、それには、「奥州伊達郡靈鷲山（福島県伊達市靈山寺）にあった慈覚大師

の作と伝え、八百年の星霜をへて、御身は朽ち、頭部のみ残った。これを重譽自然上人の力により復興したのが本尊である」と記されているといわれています。

また、胴部の胎内には宝永6年（1709）の造像銘があり、「佐原町の伊能茂左衛門親子の寄進により、京都麩屋町の大仏師高橋兵部が元禄16年（1703）から宝永2年（1705）にかけて製作した」ことが記されています。このことから現在の像容は、江戸中期まで残されていた頭部に、新造の胴部を合わせて製作したものと推察されています。

本格的な定朝様式の作品で、巨像にもかかわらず全体と細部のバランスが良くとれていて、しかも、衲衣の襞の処理に見られるように正統の技法を持った中央の仏師の手になる作品であることなどから、昭和33年4月に県の有形文化財に指定されています。